

「新約聖書を読み終えて」

2019年10月19日

私は、聖書を何回、通読したであろうか。新約と旧約を通して、せいぜい5回くらいではないかと思う。牧師を隠退し、時間に余裕ができたので、新約聖書を改めて通読したいと思った。そこで、順番に区切って、その箇所注解を書き、一回1,600字程度にまとめることにした。字面を追うだけでは流されてしまうことがあるが、注解を書けば、一字一句を丁寧に読むことができる。私の注解は読まなくても、聖書は読んでほしいと、聖句箇所を必ず掲載した。字数が限られているので、煩雑な釈義をせず、聖書記者の思いに添うように簡明に綴った。2014年6月27日から始め、2019年10月16日までの約5年4ヶ月、1,164回に渡り、27巻の新約聖書を通読し終えた。細部まで目を通すことができ、今更ながら、聖書の言葉の迫力と多様性に感嘆した。

主イエスの言葉と行動を記した四つの福音書は、何と言っても、圧倒的な迫力がある。頑迷なユダヤ教社会において、あれだけ自由な愛を発露させた主イエスの生涯は圧巻である。高校3年生の時、教会に行き始め、「キリスト教を知りたいのなら、聖書を読みなさい」と、牧師が聖書を貸してくれた。福音書の奇跡物語はあり得ないと信じる気にはならなかったが、主イエスの自由、闊達な愛には、心を奪われた。牧師に「イエスと同時代に生きて、イエスを直接、この目で見たかった」と言うと、直接見ても、聖書を通して見ても、信じる人は信じ、躰く人は拒否すると答えられた。ユダヤ教による管理体制では、人間を根源的に愛する愛を奔放に現わす主イエスは、体制を乱す者であり、亡き者にしようとすることは避けられないだろう。宗教的権力者たちは、自らの手でなく、ローマの総督ピラトによって、反ローマの政治犯として十字架刑で葬り去った。ところが、十字架で殺された主イエスが復活し、「生きている」と、弟子たちは宣教し始めた。死人の復活などにはあり得ないことで、様々な解釈が生まれた。弟子たちの間で、主イエスの愛に倣う共同体を形成した時、「イエスは生きておられる」と、喜びを分かち合った。それを、主イエスの復活と信じたとする分かり易い解釈がある。復活は史的事実の解明より、信仰に関わることであろうが、弟子たちは、死から命に甦る永遠の神に触れる体験をしたに違いない。その復活体験の宣教がキリスト教を生命的な宗教にしたと、私は信じている。

新約聖書の中で、最も古いものはパウロが書いた手紙である。パウロの働きはキリスト教にとって、圧倒的で、決定的である。復活した主イエスにとらえられ、何ものも止め得ない情熱をもって、小アジアからギリシャまで疾風のように走り回り、福音を宣教して、教会を形成した。パウロが語った福音は、人の努力によって救われるのではなく、ただ、主イエスの十字架と復活の真実が、神との関わりを閉ざした罪を赦し、全ての人を「義」とする救いであった。戒律と犠牲を強いられる宗教的義務から解放され人々はパウロの福音を喜んで受け入れたのである。パウロの手紙や弟子たちの宣教を記した使徒言行録に、その次第が著わされている。その他の書簡は、誤解と偏見を受けつつも、教会を建てようとする第二、第三世代のキリスト者たちの労苦が記されている。彼らの言葉は、主イエスやパウロほどの迫力はないが、市民権を得ようとする彼らの本音が伝わってくる。ヨハネ黙示録は、迫害者への憎しみに満ちているが、忍耐と希望をもって生きよと励ましている。聖書記者たちは主イエスの福音を証しし、信仰に生きる喜びを書き残している。

これからは、折々に、昨年11月に刊行された『聖書協会共同訳』を読みながら、メッセージを自由に書いていきたいと思っている。